

いのちの祈り

—ある女子学生の死—

寺川俊昭

一

いのちの祈り

光華女子大学で学生の皆さんの前に立ちまして、お話を申し上げるのは初めてです。私の勤めております大谷大学にも、もちろん女子の学生さんは多くおられます。しかし、全学で計算をしたのを聞きますと、男子が六割、女子が四割で、男子のほうが多いようです。女子の学生さんだけという教室もありますけれども、そういう授業には私は出ませんので、全員が女子学生である皆さんの前に立ちまして、多少落ち着きがありません。実は、私は昭和三十一年から三十三年まで、二年ほどでしたが、東山七条にあります京都女子大に勤めていたことがあります。

す。当時、私が辞めたあとですが、「女の園」という小説ですか、映画もできたかと思っていますが、それでかなり話題となっていました。当時はまだ制服の時代でしたので、同じ色の制服に身をつつんで、あの七条の坂を行き来されるたくさんの女子学生の姿に圧倒されて、教室に立つたびにおどおどし、ろくに講義もできなかったことを、ふと久しぶりに思い出しました。与えられました時間が一時間ばかりですので、途中で終わるかもしれませんが、私にとりましてはなかなか忘れられない経験でありますことを、しばらく申し上げて、皆さんといっしょに、生きること、あるいは人間の人生、このことについて思いをめぐらしていければと思っています。まいったことです。

ご存じと思いますが、東京に上智という大学がございます。カトリック教会が日本に建てたいくつかの大学のなかの代表的な大学ですが、その上智大学の先生にアルフォンス・デーケンという方がおいでになります。デーケン先生はドイツ人ありますが、それがどういう事情でか、日本の大学にきて教壇にお立ちになっている方です。このごろいろんなものに文章をお書きになっていますから、あるいはご存じかもしれません。この方がお書きになりました文章を読んでおりまして、いかにもそうだと思うことがいろいろございます。

いのちの祈り

日本の文化を代表するもの、日本人の心を培ってきたもの、これを問えば、改めていうまでもありませんけれども、なんといっても仏教の教えですね。例えば日本の文学、そういうものの正確な理解は、仏教の思想を正しく理解しないかぎり不可能だといわれるように、また、お茶であれお花であれ、仏教の精神に触れて、あのような芸道が形成されているわけですから、日本人の心を長い間、千年以上にわたって培ってきたものは仏教だというのは、これは日本に少しでも関心のある外国の人が、ほぼ共通してもっている日本理解の基本です。ところが、デーケン先生が最近繰り返し指摘して、日本人に問いかけておいでになることは、「仏教というのは非常に豊かな人間観、すなわち人間をどのようなものとして観るかという眼を鍛えていく智慧の教えだから、仏教は人間をみる独特の眼をもっている。仏教が磨き、そして鍛えてきた人間観、それは一言でいえば、わたしたちが人生と呼んでいるものを、人生と呼ばないで「生死」と観たことである。生まれそして死んでいくもの、これが人生だ、あるいは人のいのちだと、こういう確かな智慧の眼を仏教はもっている。したがって、日本人は人生を生死するもの、生死のなかにあるもの、生まれそしてやがて死にいくものと、こういうふうに見ていると思っていたのだが、実際東京でいろんな人に会ってみると、ずいぶん違う印象を受ける。それは今の

日本人は、死ということを人生を考えていくときに視野のなかに入れていないのではないか、
こういわざるをえないような非常に歪んだ人生、生きることだけで人生を考える、死をほとん
ど忘れてしまったような人生観をもっている。こういう強い印象を受けて、自分はそれがきわ
めて不本意だ。これは非常に脆い人生観であるといわざるをえない思いがする」。こういうこ
とをデーケン先生が繰り返しておっしゃっているのです。そのように日本人のもっている人生
観を反省的に採り上げながら、「人間の人生が、人のさだめというものが、死ぬことを避けら
れないものであるならば、死というものを踏まえて自分の人生を観、そしてやがて死が近づい
たときに、安らかに死を迎えていきたい、そういう心の準備、こういうものが生きている人間
の大切な務めではないであろうか。だから、人生はただ生きるということではなくて、安らかに
死を迎えるために、一人ひとりが自分の人生を確かなもの、美しいものにするために、どうし
てもしなければならぬ死の準備教育をしていく期間でもある」。こういうことを、日本人で
はない、ヨーロッパのカトリックの信仰をもった先生が、非常に強調なさっていることです。
そういう問いかけなども思い起しまして、自分にとって忘れがたい一つ二つの経験を申し上げ
たいと思います。

いのちの祈り

私は昭和四十一年から今の太谷大学に勤めることになったのですが、そのころから女子学生が次第が増えてまいりました。五十代ぐらいの先生方のお話を聞きますと、昔は太谷大学には女子学生はほとんどいなくて、女性の人がいると思ったら尼さんだけだったと、こういうような状況だったのだそうです。しかし、四十年を過ぎましたころから、女子学生が少しづつ増えてきましたので、女子のための学寮を造ろうということになりました。そして昭和四十二年でありますが、大学のすぐ側に、少し大きな民家を買って、女子寮を開設いたしました。いま申しましたように、私はわずかばかりの期間ですが、女子大に勤めていた経験がありましたので、その最初の寮監を命ぜられて、五年間ほど、女子の学生の諸君といっしょに生活することになったのです。もちろん家内がおりましたが、女子学生と女子寮でいっしょに生活をして、私は若い女性についてずいぶんいろんなことを教えてもらいました。そして五年間で疲れはてて、寮監を辞めました。

寮は四人部屋でしたが、冬になりますと部屋にこたつを出すのです。用があつて部屋にいきますとき、男の寮でしたら「おうい」といって部屋に入ればいいのですけれども、女子寮はそういうわけにもまいりませんので、必ず「入ってもいいですか」とまず聞くのですが、「どう

ぞ」といって、すぐ入れてくれたことは一回もありませんでした。「ちょっと待ってください」といって、ばたばたとして、しばらくしてから「どうぞ」といって部屋の戸を開けてくれるのです。外にいてもすぐわかるのですが、部屋が散らかっていますので、その散らかった部屋を少し片付けてから私に入ってもらおうということなのです。そのころのことで今でも苦笑いが出るのですが、いつものように「入ってもいいですか」といったら、「ちょっと待って」といって、ばたばたと部屋を片付けておりました。しばらくたってから「どうぞ」といって、部屋に入ってこたつに入ったのです。皆さんもそうだろうと思いますが、女子学生の人には果物やらお菓子やらと、飲むもの、食べるものをたくさん部屋に持っているのですね。ですから、お茶でも飲みたくなったら、寮生の部屋にいけばいいなにかがあって、たいへん都合がよいものですが、部屋に入ってこたつあたり、お茶をいただきながら用件を話しつつ、ふと部屋の隅を見ましたら、なにか丸いドーナツ状の物が転がっているのです。これはなにだろうと思っ
て見ていましたら、寮生の一人が「まあ」というて、それをあわてて片付けました。なにかと
いうと、当時、スカートの短いのはやっておりまして、短いスカートを脱いでそのまま部屋
の隅に置いていたらしいのです。脱いでほってあると、丈が短いためにドーナツ状になるので

いのちの祈り

すね。初めてドーナツ状スカートというものを見まして、たいへんおかしかったのですけれども、女の人というのは、自分の着ているものなどはきちんと畳んでしまっておくもの、あるいは食べかけたお菓子やら、飲んだ茶わんなどはきれいにしているものだと思っていたのですが、どうも考えているのと実際とは大違いのようでありまして、男と少しも変わらない青年の乱雑さ、それがそこにあることを教えてもらったことでありました。

二

ところで、そのようにして最初の寮監を勤めた昭和四十二年のことでした。その年には二十二人の寮生が入ってきましたけれども、入って一年たたないうちに、一人の寮生が病気で亡くなりました。それから三年目に入った寮生でしたが、これは寮を出て、四回生になったときに亡くなるということがありました。五年間の寮監の経験のなかで、寮で寝起きた百人ほどの学生のなかで、二人の人が亡くなっていったのです。その亡くなっていったときの姿が、それから三十年近くたちますけれども、どうもなかなか忘れられないものとして、心のなかで瞬くのです。

寮では、四月の終わりにから五月のころ、寮生が仲良くするために、地方から来た人がほとんどでありますから、京都のいわゆる名所をいっしょにピクニックするということをしております。そのときは銀閣寺から、皆さんもよくご存じの哲学の小道をいっしょに歩きまして、南禅寺の境内を下がって河原町のほうへ出たのです。南禅寺の境内のあたりまできたときに、やがて十月のちに亡くなっていくのですが、短期の国文科に入っております一人の寮生が、私の側を歩いておりました。南禅寺の境内をたくさんの方がそぞろ歩きをしているなかに、幾組かのカップルがありました。当時の言葉では「アベック」といっておりましたが、いかにも仲良さそうに、男子の学生らしい人と女子の学生らしい人とが連れ立って歩いているのを見まして、その学生が、「私も早くあなりたいわ」といいました。男とはだいぶ感じ方が違うなあと感じたのは、そのときが初めてなのです。つまり、仲良さそうに連れ立っている歩いている同じ年ごろの青年を見まして、田舎から出てきているその学生さんは、お寺の一人娘さんでありましたが、好きな人ができて楽しい学生生活を送りたいということでしょう。存外と正直に率直な思いをいうものだなあと、そう思って聞きました。それでその人の名前と顔を強く印象づけられたのです。

いのちの祈り

やがて夏休みになり、九月に入って学校が再開されました。当時は九月中旬から前期の試験がありました、その学生は試験を受けている最中に、気分が悪くなったというよりはもっとひどい状態でしたが、異状が起きまして、試験を受けることができない状態になりましたので、途中でやめて保健室へいきました。しかしどうも状態がよくならないものですから、すぐ医者へいって診てもらおうということになったのです。それから秋、食欲の秋ですから、みんなはものをよく食べ、少しずつ丸味も増えてきますし、学生生活にも慣れますから、河原町のほうへ行くことも多くなるなど、本当に楽しそうに学生生活を送る季節になりました。けれども、その学生さんは、みんなが丸味を帯びてくるのに反比例して、だんだんと痩せて顔色も白くなり、十月になりますと、言葉はよくありませんけれどもそのまま申しますと、癲癇のような発作でばったり倒れるというようなことが起こるようになりました。それでご両親に連絡いたしましたところ、たいへん心配して、府立医大、あるいは京都大学の病院へ行って診てもらったのですが、どうもはっきりとした病名がわかりませんでした。適当な治療をしていただいているのだけれども、日増しに痩せ衰えて、とても大学で勉強を続けることはできないという状態に陥ってしまいました。それで親御さんと相談をして、せっかく学生生活を始めたばかりで

あるけれども、体が第一だということで、国元のほうに帰りまして、入院して治療を続けることになったのです。

そして、年も改まりまして、大学は後期の試験を行なう時期になりました。つまり二月に入ったのです。そこで試験をどうしたらいいだろうかということ、お宅のほうに京都から電話をいたしましたら、お母さんが出られて、おろおろ声で「あの子はもうだめなんです」とおっしゃるのです。「だめなんだとはどういうことでしょうか」と聞きましたら、少し詳しく事情をおっしゃいましたので、「それは知らなくて済みませんでした」と申して、すぐお家のある北陸のある町へお見舞いに行きました。

入院されている病院にお尋ねしましたら、お母さんが「よく来てくれた」とおっしゃるのですが、「せっかく来ていただいたのだけれども、会ってくれるな」といわれるのです。意味はもちろんよくわかります。病み衰えている姿を見せたくないということでしょう。だいぶどののだろうかと思いつながら、「それは無理ありませんから、どうぞよろしく伝えてください」といって帰ろうとしましたら、「せっかく来てくださったのだから、やはり一目だけ会ってやっていただきますようか」とおっしゃるのです。「もちろんお会いします」と申しましたら、

いのちの祈り

「ちょっと待っていただけませんか、部屋を片付けますから」といわれたのですが、お母さんはよく知っている方でしたので、部屋を片付けるといのは、「実はおしめを取り替えてやりたいからなんです」とおっしゃるのです。これはひどいなと思ってしばらく待っておりました。やがて「どうぞ」といわれて病室に入りました。そしたら、十八か十九の少女の愛くるしさは全然なくなっており、げっそりと痩せ衰えて、白い顔色で、意識がもうろうとしておりました。私が行ったのが全然わからない状態でした。いかにも哀れという感じでありましたが、せっかくと思つて手をかなり強く握つて、その人の名を二三度声高に呼びましたら、あらぬほうを見ておりました目がひょっとと正面に戻りました。つまり正氣に戻ったのです。そして私だということがわかったようで、私の握つた手を握り返す力はないのですが、なんとなく手に力を入れていのような感じでした。そして私の目を見て、言葉が正常にいうことができるならば、「よく来てくれた」ということをいいかけたのだらうと思いますけれども、「あーあー」という声が二声三声出るだけでした。しきりに私の目を見て「あーあー」といいながら、なにかものをいいたそんな風情でありましたが、やがて目がよそへ向いて、手にも力がなくなり、意識がまたもうろうとしてしまいました。お母さんが側におられて、「こういう状態になってしまっ

て、お医者とはあと何日かといわれるのですが、親としてみれば可哀そうでなりません」と、こう涙声でおっしゃっておりましたが、慰める言葉もありませんでした。故郷へ帰ってからどういう経過だったかをうかがったのですが、ある病氣の名をおっしゃり、当時は治療の方法のない血液の病氣ということでした。

それからしばらくは試験などで忙しくしておりましたので、連絡もしておりませんでした。半月もしないうちに「亡くなりました」という電話をお母さんからいただきました。それでご葬儀にお参りをしたのですが、お葬式がおわった後、お母さんがこういうことをお話になったのです。「可愛い一人娘が、思いがけずに治りにくい病氣になって、一日一日痩せ細っていき、親としてたまらない気持ちであつたので、毎晩添い寝をしてやりました」とおっしゃるのです。もう十八、十九ですから、すっかり立派な大人のようになった娘が、なんだか沈み込んだような気持ちになってあまりものもいわないけれど、それでも母と娘ですから、幾晩もいっしょに寝ているうちに、ぼつりぼつりといういろいろなことを寝物語に話していたのだそうです。そのなかで、娘がこういうことをいうておりましたとおっしゃるのです。

それは何かといいますと、「私は、この北陸の町から京都へ行って、しかも大谷大学に入っ

いのちの祈り

てよかったと思う」ということでありました。お寺の娘さんですから、子どものころからお寺でご法話があるときお参りして、ご門徒の皆さんといっしょにご法話を聞いて育ったのです。その少女時代に聞いたお話のなかに、もちろん親鸞聖人の人生についてのお話がございますでしょう。そういうことをお話になりながら、「人はいつまでもこの世に生きていることはできないのだ。どんな人間でも、この世から去っていくとき、この世のいのちが終わっていくときがあるかどうか知りませんが、よく見るといいですね。死体となってしまった人間、そして火葬場へ持っていくって、焼いてもらった姿、お骨になってしまった姿、それをできればよく見ておくほうがいいと思いますけれども——肉体はいのち終わるときがき、滅びのときがきてしまうのだが、親鸞聖人が教えてくださるのは、肉体のいのちは滅んでいくけれども、南無阿弥陀仏という言葉、如来の名を南無阿弥陀仏と呼ぶそのことによって、浄土に生まれる道が開かれてくるのだ、こういうことを、自分のお寺のお話のなかで聞くことがしばしばあった。そのころはなんのこともよくわからないし、妙なことをおっしゃるぐらいに聞いていたのだが、大学へ入って思いがけず私は病気になる。それで、寮でみんなといっしょに生活しているのだけ

れども、友達は何朝ノートや本を持って嬉しそうにおしゃべりしながら大学へ行き、楽しそうに勉強し、運動し、やがて授業が終わるといかにも楽しそうに遊びに行く。自分もみんなと同じように勉強もし、運動もし、河原町にも行きたいし、嵐山にも行きたいし、東山の道も歩きたいし、あちらこちらを訪ねて、京都で学ぶことを実感したいと思うのだが、朝起きると身体はだるく、なんだか地面の底へ沈み込むような、重く暗い気分に見われてしまう。それで大学へ行く元気もなくて、みんなを送って、寮で一人寝ていると淋しくてたまらなかった」と、寝物語りに話していたといわれるのです。

それからだんだんと病気がひどくなって、「ひょっとしたら自分はもうだめなのではなからうか。再び元気になるときが、もう自分には来ないのではないかとさえ感ずるようになって、どうも気が滅入ってやりきれなくなり、こんな情けない気分で生きていなければならないのであるならば、いっそ自分でいのちを絶ったほうがいいかもしれないとさえ、一人で布団のなかで休みながら思うこともいくどかあった。かけがえのないこの若いいのちが、思いがけない病気のために滅んでいくのではないかと感じて、たまらない気持ちになったころ、昔聞いた『われわれはこの世のいのちが終わって、それでなんにもなくなってしまうのではないのだ。もし

いのちの祈り

南無阿弥陀仏の教えに遇うことができれば、念仏して浄土へ生まれていくことができるのだ、
こう聞いたなつかしい親鸞聖人の教えの言葉が、ふっと心に浮かんできた。自分は親鸞聖人と
いう名を、そして親鸞聖人の教えはお念仏、南無阿弥陀仏だということを聞いて育ってきただ
けでなくて、京都の大学に来て、毎週の授業のなかで、子どもときから聞いてきたことと同
じことを聞くことができて、これは田舎のお坊さんのお話だけではなくて、確かな人生の智慧
だということを改めて強く感じ、その意味で自信をもつ思いがしたのだか、自分がこのように
病み衰えてみると、それが本当に嬉しい。本当に力づけられるような言葉を聞いた思いが改め
てしてくる。その意味で、大谷大学に入って親鸞聖人の教えを学ぶことができたことが嬉しい」
と、こういうことを娘がいつておりましたと、お葬式の後、お母さんが途切れ途切れに、長い
長いお話をしてくださいました。

お葬式の終わった後、しばらくしましてから、ご両親が娘さんの残した荷物を片付けにこら
れました。それをお手伝いしながら、今は遺品になってしまった娘さんの荷物を、同室の学生
さんたちに、いっしょに暮らしていただいたせめてもの記念として貰ってやつて下さいといっ
て、着るものやら本やらをお配りになっていましたが、そのなかに学生ですからノートがあり

ます。そのノートをお母さんが見ておられましたら、その一部に日記ふうの文章が書いてあったのです。それを見ておられたお母さんが、「あら先生、あのときにお話したのと同じことを書いております」とおっしゃるのです。それを見ますと、今申し上げました、「私たちには念仏して浄土に帰っていく、こういう確かな人生が恵まれるのだ。私は毎日が滅入って、これからどうなるのだろうか、もうだめなんだろうかと感じて、悲しいのと情けない気持ちで耐えられない。そのなかでこのことを思い出すと少しは勇気づけられ、しっかりしなければならんと思うのだ」というような文章が、ノートの二頁ぐらいに書いてありました。それを見まして、そのことがよほど強く思われたのであらうと感じたことです。

たまたまの経験なのですが、このような若いのちが思いがけない病気に遭うて、人生のこれからというところで散ってしまうのですね。その早く終わっていかねばならないわがいのち、それに触れた一人の女子学生が、われわれのいのちは死によって終わっていくのだろうか、もしそうであるならば、それはあまりにも冷たく残酷だ。ところがそういう私たちに、親鸞聖人という方が、われわれの人生は一人として死から逃れる術をもつ者はいない、人のいのちはすべて滅んでいくのだけれども、しかし南無阿弥陀仏、こう如来の名を呼ぶ、こういう道

いのちの祈り

をいただくことができたならば、肉体の死によって滅び去っていくのとは違って、確かな、生きる事が嬉しいといえるような、豊かな輝くような人生をいただくことができるのだ。そういうことを死に臨んだわがいのちをいとおしむなかで、その女子学生の人は改めてよく聞き取っていかれたのだと思うのです。

年は十八、九で終わり、北陸の雪のなかでこの世から去っていった一人の人間ですが、われわれのいのちが本当になにを願ひ求め、なにを祈り求めているのであろうかということ、よく教えてくれた人であったように思われてならないことです。二十三回忌も終わったかと思えますけれども、おりおりその後、ご法事などにお参りをいたしまして、なにか大きな灯を私たちのために掲げてくれた人の一人であらうか、こういう思いで追憶したことでありました。

三

もう一人の寮生であった人が亡くなったのは、少し違った場面でありましたが、四回生になって卒業論文の準備を始めるころ、思いがけないことで亡くなったのです。その故郷のお宅をお訪ねしたときに、ご両親が、この方も一人娘さんですが、「娘のいた部屋を見てやってくださ

い」、こうおっしゃるのですね。そこでお父さんに案内していただいて見せてもらったのです。二階の六畳ほどの部屋でありましたが、壁には彼女がいつも着ていた普段着、机の上には本立てに本が並び、ノートが一冊開いたままにしてありました。あのようなときには、男親のほうが女親よりも涙脆いようでありまして、お父さんが涙を拭きながら、「夏休みが終わって、娘が京都へ行ったその日のままにしておるのです。娘は部屋をこのままにして、京都へ行って死にました。しかし、亡くなってお骨として迎えましたけれども、生きていたときに、この部屋でこういう状態で生活していましたので、それを片付けることに耐えられないのです。親の煩惱だけでも、この部屋へ来ると、亡くなっていった一人娘がまるで生きてるように思えるのです。しばらくこのままにしておきたいのです」、こういうことをおっしゃっておいりました。これもよくわかる親の思いですね。

私たちがよく心して腹に入れておきたいことは、私たちはみんな人の子でしょう。皆さんの一人ひとりに親御さんがおいでになると思います、その親が、子であるものにどれほど深い愛情をかけてくれているか、このことを「わが娘が亡くなる前に使っていた部屋を、そのまま残しておきたいのだ。それを生きているかのごとく娘を偲ぶわずかなよすがとしたい」と、こ

いのちの祈り

ういう言葉をはかれる親御さんの言葉から、よく教えられる思いがしますね。私たち一人ひとりが、どれほど大きな愛情と励ましのなかに生きていることであろうか、それを忘れてはならない、こういうことを教えていただいたことであります。

そういうことを思いながら、私は最初に昭和四十一年から大谷大学に勤めるようになったと申しましたが、それまで、昭和三十三年に京都女子大を辞めましてから、八年ほど国元の広島
の田舎の町にある県立高校に勤めていたのです。そのころの日本は高度成長の時期に入ってまいりまして、田舎からたくさんの方が都会の企業へ就職していく状況になりました。皆さんが生まれるはるか前のことですが、私の勤めていた高等学校でも、田舎の小さな学校でしたが、都会の企業に就職したいという希望をもつ生徒がずいぶん増えてまいりましたので、商業高校に切り替えることになりました。その商業高校の教育の努力のなかで、田舎ののどかな雰囲気
のなかで育った青少年女たちが、都会の企業に就職するのにどういう心構えが必要であろうか、そのことについて一度きちんとしたお話を聞くこうではないかということになりました。広島市の商工会議所に、自分で企業を経営なさっているしっかりとした方に、こういう趣旨でお話し
願いたいのだが、適当な方をご紹介いただきたいとお願いして来ていただきました。

そのお話を聞いたのは昭和三十八年か九年ごろですから、三十年近く前になります。広島から講師の方が見えになりましたして、講堂に全校生徒が集まってお話を聞いたのです。五十前後のしっかりとした方という印象が残っております。一時間ほどのお話で、あのことは全部忘れてしまいましたけれども、冒頭の一言だけを三十年たったいまでも覚えているのです。その方はこういうことをおっしゃったのです。「皆さんは、南無阿弥陀仏という言葉を知っていますか」。繰り返し申し上げますけれども、田舎の商業高校の生徒に、都会に出て企業に就職する心構えをお話していただきたいとお願ひしたご講師が、最初にいわれた言葉が「皆さんは南無阿弥陀仏という言葉を知っていますか」であったのです。そして、「人間は必ず死ぬるんですよ。しかも、（人間というものは死ぬものだという一般論ではなく）この私が死ぬる、このことを計算に入れないような人生観は、全然信用することはできません」。これは高校生に向けて話された言葉であります。皆さんは大学生ですから、意味はよくおわかりと思います。「南無阿弥陀仏」、大きな光と限らない寿である仏さま、如来さまによって私は生きていきます、こういう心を表す言葉であります、それをおっしゃるのですね。「皆さんは南無阿弥陀仏という言葉を知っていますか」、そして、「人間は必ず死ぬるんですよ。しかも、この私が死ぬる、このこ

いのちの折り

とを計算に入れないような人生観は、全然信用することはできません」
、こういわれました。
そして、就職の心構えをお話になったのです。

最初に、上智大学のデーケン先生が、「日本人は千年以上の長い間、仏教によってその人生観を鍛え、精神生活を行ってきた人たちであると思っている。仏教は人生を人生とみないで、
“生死”と捉えてきた。当然仏教の教えによって人生を正しくみることのできる人は、死というものをみつめて、いま生きている人生を確かなものにしていこうとする、豊かで確かな人生観をもっているだろうと思っていれば、日本の現実はずっと反対だった。いまの日本人は、ことに若い世代の人は、死ということを全然考えようとしないう。死ということを全然考えようとしないう人のもつ人生観は、非常に弱いものだ」と指摘なさっていることを申し上げましたが、
たまたま三十年ばかり昔の広島県の田舎の高校で、繰り返しますけれども、「皆さんは南無阿弥陀仏という言葉を知っていますか」、そして、「人間は必ず死ぬるんですよ。この私が死ぬということを計算に入れないような人生観は、全然信用することはできません」といわれたことを思い合せることです。

四

とりとめのない話をいたしましたけれども、国際化の時代ですから、皆さんも日本以外の国の人々と接触される機会も多いだろうと思います。しかし、アジアの国々であれ、ヨーロッパの国々であれ、あるいはアメリカであれ、まともな人生観をもち、まじめに人生を生きていくとされる人は、ほとんど同じように確かな信仰をもっておられます。日本人が「あなたの信仰はなんですか」と聞かれて、「私は宗教をもっていない。無宗教である」と、こう答えたら、外国の心ある人には、この人は信用できないという烙印を捺されると思っておるべきです。

私の弟は広島大学におりますが、十年あまり前に、イギリスのある大学に留学して、二年足らず勉強してきたことがありました。その間、あるちゃんとしたご家庭に下宿させていただきました。家族の人といっしょに食事をするという生活をしていたのだそうです。弟が帰ってきていっていましたが、食事の前に手を合わせて「いただきます」、食事が終わると「ごちそうさまでした」というでしょう。皆さんもやっていますか。いきなり箸をとって、ぱくぱくやるのが多いのですが、ちゃんとした家庭であれば、手を合わせて「いただきます」、手を合わせて「ごちそうさま」と、こういう言葉とともに食事をはじめ、食事を終える、これが普通で

いのちの祈り

す。それをしないのは教養がないのです。弟も寺で育った男でありますから、箸ではなくてフォークとナイフではありますが、食事の前に手を合わせ、「いただきます」とつぶやいて、それから食事を始めていましたら、何日かたって奥さんが、宗教の伝統は違いますが、食事の前に手を合わせているのはお祈りをしているとすぐわかりますから、「おまえはやはり仏教徒であるか」と聞かれたのだそうです。「そうです、私は仏教徒です」と答えると、奥さんが、あなたは食事の前後に手を合わせてお祈りをなさっており、仏教の信仰をおもちのようであるが、それを見て私は、あなたは立派な紳士だと信頼することができた、こわいわたのだそうです。ご主人のほうは、どこかの大学の先生であったようですが、同じことをいわれて、仏教について、あるいは仏教文化について、いくつかの問い掛けがあったそうです。弟は教育学が専攻ですから、仏教のことはよくは知りませんが、知っているかぎりの日本の仏教のお話をしたので。そういうことから感じますのは、別に改まって自分は仏教徒だと名乗ったり、仏教の教えはこうだというのではないけれども、日常毎日行なう食前・食後に手を合わせてお祈りをする、感謝の心を表す、そういうことだけでも、この人は立派な紳士だ、人間として信頼できる人だと、こういう評価がなされるということです。

その仏教、死んでからどうこうというような遠いものではないでいただきたいのですが、ことに親鸞聖人の教えが、いま申し上げましたように、早くいのち終わった一人の少女がいった、「私は親鸞聖人の、念仏して浄土に生まれる道があるのだ、という教えを本当に身に沁みて聞くことができ、私のいのちは早く終わっていくと思うけれども、しかし嬉しい人生をいただいたように思えます」、こういう言葉にありますように、生きることの厳しい私たちの人生のなかで、しかも皆さんのように青春のさなかにいる人間にとって、親鸞聖人の教えが、若さで隠されている私たちのいのちの深い祈り、われわれのいのちはやがて死ぬとき、滅びるときが来るのだけれども、大きな寿、限らない光、それである如来によって生きる、そういう心を南無阿弥陀仏に恵まれた人は幸せだ。滅び去っていくいのちのなかにあって、滅びないいのちの輝きを見出だすことができるのだということを、これが本当の人生の道だと教えるかのごとく、さまざまな生きざまを示してくださいました人々から、改めて教えていただくことであります。

先ほど申しました、高校で就職の心構えをお話していただいたお方が、「人間は必ず死ぬるんだぞ。この私が死ぬということを計算に入れないような人生観は、全然信用することはできない」といわれたときに、その人の心になにが浮かんでいたであろうかと、聞きながら思った

いのちの祈り

のでありますが、私はこの人は間違ひなく原爆に遭うた人だと感じました。皆さんにとって広島に落ちた原爆などは、四十年前の遠い物語であるかもしれませんが、四十万いた広島市民のなかで、二十四万人の人が死に、もしくは怪我をしました。一瞬のうちに七万人の人が死んだといわれています。そういう悲劇の炸裂のなかで無残な死を遂げていった、そういう事実がわれわれの前にあるわけですね。いやおうなく私が死ぬときが来る、こう思うことによって、その人は本当に確かな人生を生きていく自信、智慧の眼がほしいと思われたに違いないと思います。

申し上げようは不十分でありますけれども、この大学も親鸞聖人の教えを、青年期における人間形成の大切な灯として、それこそ大切に掲げておられる大学であります。いろいろなことを通して親鸞聖人の本当に人間を愛し、いのちをいとおしんだ、その言葉に耳を傾けてくださるときをお持ちいただければ、たいへんありがたいと存ずることでございます。

意を尽くしませんが、少し時間が過ぎましたので、これで終えさせていただきます。